

M E S S A G E

里地里山を想う

「里地里山」という言葉は、最近のものだと思う。私が子どもの頃は、ただ「山」とっていた。山にも本当の山つまり自然林と、里山つまりただの山があった。子どもが虫をとるのは、こうした里山だった。そこにはいろいろな虫がいて、あとで考えてみれば、それがいわゆる「普通種」だったのである。

普通種とはどこにでもいる虫で、身近に見かけるものである。身近にいるということは、ヒトが平地に住む傾向があることを思えば、平地性の虫である。だから図鑑にはそうでない虫を山地性と書いてあった。いままでいえば自然林に見られるということであろう。

その里山が、いまではしだいに自然林のほうに移行している。人間が手を入れないから、当然であろう。し

かし移行期だから、完全な自然林でもないし、そうかといって、人手による秩序もない。いわば変な山が増えた。そこを土建屋さんが資材置き場にしたり、だれかがゴミを捨てたりするので、場所によっては目を覆わんばかりの姿である。見たくない。

こうした荒れた環境でも、まだ頑張っている虫がいる。そういう虫がなぜ生き続けているのか、近頃になってやっと理解した。いまのような都市型の環境でも生きられる虫は、自然状態ではどこに住んでいたのか。荒地である。自然状態でも荒地は発生する。河川の氾濫、崖崩れ、噴火、津波など、さまざまな災害がある。そういう場所に好んで住む虫たち、それがヒトの文明とともに数が増えたのであろう。ヒトが作り出すのは、

自然の目から見れば、典型的な荒地だからである。そこにはカチッとした生態系はおそらく成立していない。

里山は自然林と荒地のあいだにある。そうとしかいえないようがない。両極だけが定義できるが、あいだの実態はさまざまである。だからその虫は、長い年月のあいだに変わっていく。私は生まれたときから鎌倉だが、鎌倉の「山」の虫は、すいぶん様変わりした。丁寧に書いてもわからないと思うが、要するに森の虫がいささか増えて、開放環境の虫が減少した。ただし全体としてはすいぶん貧弱になった。虫の数が減った。それも極端に、である。思い出したくない過去がある。イヤだから思い出したくないのだが、過去がイヤなのではない。豊かだった過去に引き換え、いまはあまりにも虫がいない

ので、過去を考えたくないのである。

海岸の松林に、犬の死体があった。そこにルリエンマムシとオオハネカクシが無数に集まっていた。いまこの二つの種類を神奈川県で見つけたら、専門の雑誌に記録するような事件であろう。それを考えてもわかる。私が生きているあいだだけでも、世界はすでに荒涼としてきたのである。

豊かな里地里山をなんとか保存しておきたい。それは私の夢で、前途はじつは多難だと思っている。その詳細は語るまでもないであろう。

飛騨清見付近の集落：葺き小屋は農作業時の休ん場
(写真 初芝成彦)

養老孟司

YORO Takeshi

■プロフィール：

1937年神奈川県鎌倉市生まれ。1962年東京大学医学部卒業後、解剖学教室に入る。1995年東京大学医学部教授を退官。現在東京大学名誉教授。自然という複雑なシステムとの上手な付き合い方として、西欧式のコントロールという発想ではなく、日本古来の「手入れ」の思想が大事であるとする里地里山にもふれた独自の環境論や無類の昆虫収集家としても有名。著書に『唯脳論』『バカの壁』『死の壁』『超バカの壁』『いちばん大事なこと—養老教授の環境論』などがある。

